

『青いカーディガン』

多々良 秀史

あらすじ

老人ホームで働く介護士の“私”。この仕事は、生きがいそのものだった。そんな私の密かな楽しみは、施設を訪れる「青いカーディガン」の彼女だった。だが、彼女との交流や日常に生じる小さな違和感が、私の確かなはずの現実を静かに揺るがしていく……

特記事項（作品に込めた思い）

私の母は認知症で施設に入り、そのまま最期を迎えました。とても働きものだったので、この物語のように、日々生き生きと暮らしてきてくれたら良かったなと想像しました。また、主人公のモデルは今も施設にいる私の叔母（亡くなった母の姉）でもあります。私が赤ちゃんの時に世話をしてもらったエピソードも実話です。「青いカーディガン」の彼女は、読む人によって様々な姿に映ることでしょう。読者それぞれのストーリーが出来上がるといいなと思います。

文字数 4,863 文字

朝の光が、カーテンの隙間から差し込んでくる。窓を開けると、秋晴れの空が高く、さわやかな風が優しく頬を撫でる。最近少し肌寒くなり、その空気は心地よい緊張感を胸の奥に広げていた。

「よし、今日も一日、頑張ろう！」

姿見に映る自分にそう声をかけ、背筋を伸ばす。糊のきいたグレーのポロシャツ、アイロンのかかった白いスラックス。清潔感を第一に考えたこの制服は、私の誇りだ。

私は老人ホームの介護士をしている。責任は重いが、そのぶん、かけがえのないやりがいがある。何より、誰かの役に立っているという確かな実感。それが、気力も体力もまだまだあふれている私の原動力だった。

廊下に出ると、すでに食堂からはにぎやかな声が聞こえてくる。同僚たちが朝食の準備を進める音、そして入居者のみなさんが少しずつ集まり始める気配。

「おはようございます。気持ちのいいお天気ですね」

「おはよう、中山さん。今日も元気そうだ」

そんな何気ない挨拶を交わしながら、テーブルの配置を整え、各席に新聞を配って回る。角の席に座る鈴木さんには、いつものように将棋盤も置いてあげる。彼は少々気難しく口数こそ少ないが、私が盤を準備すると、いつも少しだけ目元を緩めるのだ。そんな小さな変化に気づけることが、この仕事の醍醐味だった。

「中山さん、これ昨日の夕刊ですよ～」

早番の佐藤さんが、私が配った新聞を手にも、いたずらっぽく笑う。

「あら、やだ。ちゃんと確認したつもりだったのに。ごめんなさいね」

照れながら笑うと、近くにいた入居者の方々もつられて朗らかに笑ってくれる。私は少々「天然」なところがあるようで、こうして失敗しても場を和ませられるのは、私の数少ない特技かもしれない。

たくさんの人たちと関わり、頼りにされる。自分の存在が必要とされていると実感できるこの場所が、今の私のすべてだった。職員の仲間も気さくだし、入居者のみなさんも優しい。この職場はととても働きやすく、居心地もよかった。

そして、何より――。

「おばさん、そろそろ休憩時間かな？」

ふらりと現れるあの女の子。青いカーディガンの彼女が来てくれるのが、最近の私の密かな楽しみだった。

まだまだ若いつもりの私にとって、「おばさん」と呼ばれるのは、少し心外ではあったけれど、まあ、さらに若い彼女から見ればそれも仕方ない。きっと、親しみを込めてそう呼んでくれているのだ。そう思うことにしていた。

彼女は週に何度か、誰かのお見舞いに来ているようだった。特定の入居者と長く話し込んでいる様子はないが、いつも誰にでも優しく微笑みかける。私と目が合うと、遠くからでも静かに手を振ってくれるその仕草に、胸がじんわりと温かくなる。

「こんにちは。今日もお元気そうね」

彼女がそう言うだけで、一日の疲れがふっと軽くなる気がした。笑顔がとても優しく、彼女が近くに立つだけで、空気がやわらかくなる。そして、時々、なぜか、他人とは思えない不思議な気持ちになることもあった。

いつの間にか、彼女はすっかりここに馴染んでいて、入居者や職員のみなさんとも顔見知りのようだった。もしかしたら、彼女は派遣かパートのスタッフかもしれない。ただ、誰も彼女について話題にしないのが少し不思議だったが、それも日々の忙しさゆえだろう。

ところが、ある日、彼女がふと漏らした言葉が、湖面に落ちた木葉のように、心に小さな波紋を広げた。

「おばさん、やっぱり昔のお母さんに似てるね……」

どうやら私は、彼女の母親に似ているらしい。そうか、それで彼女は私に親しく接してくれているのかと腑に落ちた。ただ、なぜ“昔”なんだろう。

ある日、スタッフルームの近くを通りかかったとき、中で話している声が聞こえた。

「あの方は、ここで介護士をされていたそうですよ。だから、今でもご自分にできることを探して、手伝ってくださるんでしょうね」

誰の話だろう。あ、きっとあの青いカーディガンの彼女のことに違いないと、妙に納得した。

けれど、違和感の波紋はまだ残っていた。その日の午後、ホールに職員たちが集まって何やら打ち合わせを始めた。私もその輪に加わろうと足を踏み出し

た瞬間、リーダーの田中さんが私に気づいて、優しくも困ったような笑顔を向けた。

「中山さん、すみません……。今日のレクは、あちらで映画鑑賞会があるそうですよ。みなさんをお願いできますか」

そう言って、入居者たちが集まっている一角を指さした。私も打ち合わせに加わりたいのだが。

「……そう、そうなのね。ありがとう」

平静を装ってその場を離れながら、自分に言い聞かせる。きっと、今日の私は担当から外れていたのだ。そうに違いない。

先日は廊下の突き当たりにある、大きな鏡に映る自分を見てどきりとした。少し痩せたのだろうか。目元に知らないしわが増えた気がした。このところ、入居者の入れ替わりも多く、忙しかったので、少し疲れがたまっているのかもしれない。

そして今日、その事件は起きた。早番の仕事を終え、いつものようにロッカールームへ向かった。私のロッカーは窓際から三番目。そう、確かそこだったはずだ。しかし、そこには「高橋」という見慣れない名札がかかっていた。

「え？」

おかしい。誰かが間違えたんだわ。そう思って隣を、そのまた隣を見るが、「中山」の札はどこにもない。心臓が早鐘を打ち始める。どうして？ 昨日、日誌を入れたのは、確かにここだったのに。

呆然と立ち尽くしていると、一番奥の棚に、古びた布製のカバンがぽつんと置いてあるのが目に入った。見覚えあるような、ないようなカバン。だが、そこに付けられた黄ばんだタグには、インクがかすれた文字でこう書かれていた。

「中山 裕美子 様」

「これは……私の？」

恐る恐る手に取ると、ずしりと重い。中には古びたアルバムが入っていた。表紙をめくると、そこに知らない女性と小さな子どもの写真があった。

そこへ、あの青いカーディガンの彼女がひょっこり顔を出した。

「それ、懐かしいですね」

「……私、知らないわ」

「おばさんが忘れてるだけです。でも、大丈夫。ちゃんと、思い出してくれるって信じてますから」

どうしても思い出せなかったけれど、彼女の言葉は、あまりに優しく、からかっているようにはとても思えなかった。ただ、私の混乱は深まるばかりだった。

ここのところの疲れのせいか、その夜から具合が悪くなり熱が出た。長い間、この仕事を続けてきて、こんなに本格的に寝込んでしまったのは初めてかもしれない。

「仕事に……行かなきゃ……」

そう思うのに、鉛のように重い身体が動かない。静まり返った部屋に、一人きりで横になっていた。熱のせいか、時間の感覚も曖昧になっていく。

瞼も重く、目を閉じると若い頃の記憶が蘇った。あれは、深夜の巡回中だった。認知症の進んだ小林さんが、亡くなった奥さんの名前を呼びながら廊下をさまよっていた。新人スタッフがオロオロする中、私は駆け寄り、彼の冷たい手を握った。そして、叱りつけるでも、無理に部屋へ戻そうとするでもなく、ただ静かに彼の話を聞いた。一時間以上もそうしていただろうか。やがて彼は落ち着きを取り戻し、「ありがとう」と呟いて、自分から部屋へ戻ってくれたのだ。翌朝、上司が私の肩を叩いて言った。

「中山さん、昨夜はありがとう。おかげで、小林さんは安心して朝を迎えられた。あなたはこの施設の宝だ」

思わず涙がにじむ。あの頃の私は輝いていた。どんなに疲れていても、入居者さんの笑顔を見れば、また頑張れた。なのに、今の自分はどうか。何もできていない。誰の役にも立っていない。

「……情けないな」

そう呟いたとき、誰かに呼ばれた気がした。

「こんにちは。調子、どう？」

聞き慣れた声。目を開けると、青いカーディガンの彼女が、心配そうに私を覗き込んでいた。

「ごめんなさい……。今日は、動けそうにない。仕事、代わってもらえるかしら……」

申し訳なさで、声が震えた。彼女は何も言わず、静かに笑ってうなづく。

「今日は、ゆっくり休んで。大丈夫だから」

その言葉に安心して、私は再び目を閉じた。

うつらうつらと、夢と現実の狭間を漂う。誰かがそっと額の濡れタオルを換えてくれた気もするし、優しい子守歌を歌ってくれた気もする。

ふと気づくと、彼女がまだ隣に座っていた。ずっと看病してくれていたようだ。窓の外は、もう夕暮れのオレンジ色に染まっている。

「少しは楽になりましたか？」

私がうなづくと、彼女は先日見たあのアルバムを、私の枕元でゆっくりと開いた。

「見て、おばさん。この写真。海の写真」

青い空と海、白い砂浜。その情景から、ほどけていた糸がふたたび紡がれて生地にもどるように、にわかには思い出がよみがえった。

「これ……もしかして私？」

「そうだよ。おばさん」

指差された一枚には、日焼けした若い私？が、麦わら帽子をかぶって笑っていた。隣には知らない女性がいる。青いカーディガンを着ていて、まるで今の彼女とそっくりだ。

「これ、お母さんと行った沖縄旅行だね」

「お母さん……？」

「このときは、たぶん私がまだ生まれる前だね」

次のページをめくる。

そこには、また私らしき人と、さっきの彼女によく似た女性、そして着物を着た小さな女の子が写っていた。

「これも私？」

「そうだよ。お母さんと私と、そしておばさん。私が七五三の時、仕事が忙しいのに休みを取って、一緒にお祝いしてくれたんだよ。『ゆうちゃんの着物姿、超かわいい！』って、褒めてくれたの、よく覚えているよ」

そして、また次のページ。

セーラー服を着た小さな女の子と、青いカーディガンを着た私が写っていた。

「これは、私の小学校の入学式。このときは、もうお母さんがいなくて、おばさんが代わりに来てくれたね。人見知りで緊張しいの私の手を、ずっと握ってくれたでしょう？」

彼女は、今度は私の手を、両手でそっと握ってくれた。その温もりが、じんわりと心に染みていく。

すると、胸の奥で、固く凍っていた何かが、ゆっくりと溶け出していくような、不思議な感覚が広がった。

「えっ……」

「あなた……ゆうちゃんなの？ でも、優子は……」

「裕美子おばさん、私がまだ赤ちゃんのときにも、忙しいお母さんの代わりに色々と私の面倒見てくれたんだってね。ありがとう」

「今度は私の番だから」

優子にミルクをあげたり、おむつを替えた、あの日のアパートの部屋の情景が、ぼんやりと浮かんできた。と同時に、目の奥がずきりと痛む。

「あれ？でも、どうして……私は、ここで……」

混乱と戸惑いが、胸に広がる。

「うん。おばさんは、最高の介護士だよ」

「おばさんは、今もここにいて、みんなのことを大切にしてくれてる。それがどれだけ嬉しいことか、分かる？」

熱のせいも、真実も記憶もまだ曖昧なままなのに、わけもなく涙だけが止まらなかった。忘れてしまっていた悲しい記憶と、温かい記憶のかけらの両方が、入り混じって、名前のない感情が溢れ出てくるようだった。その後もずっと彼女はそばにいて、私の手を握り続けてくれていたような気がした。

数日後、熱が下がって部屋を出ると、食堂ではみんなが「おかえりなさい」と笑顔で迎えてくれた。

一人の職員が、私の腕をそっと支えてくれる。

「お元気そうで何よりです。やっぱり、中山さんがいてくださると、みんなが安心するみたいですね」

ああ、そうか。私は、まだここにいてもいいんだ。

その日の午後、彼女がまた訪ねてきた。

「おばさん、今日は忙しくなりそうですね」

彼女は、いつもの親しみのある顔で笑った。私も、ゆっくりと彼女の顔を見つめ返した。

「そうね。みんなが笑ってくれたら、それだけで私、うれしいのよ」

お互い、泣き笑いのような顔で、そっとうなずき合った。

窓際の陽光に当たりながら、うとうとしている内に、いつの間にか彼女はいなくなっていた。ふと、膝にかけられたブランケットの温かさに気づいた。見慣れた、あの青いカーディガンだった。

それは、窓の外に広がる秋の空と溶け合うような、やさしくて、どこまでも澄んだ青色だった。

(了)